

詩編 第121編 1節

「私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。」

私たちではなく、私である。一人でいる者の声である。眼前にそびえ立つ山を見上げる孤独感が漂う。山の麓から見上げているなら、周辺には人家や田畑が目に入ったと思う。しかし、ここでは山だけが迫る。谷間に立ちすくむ者の声かもしれない。山間を吹き抜ける風、ざわざわと揺れ動く木の葉、谷川の音が両壁に反響する。深い谷間に沈み込みそうな私にこみあげる声が生まれる。

一人で立つとき助けが必要であることに気付かされる。都会のざわめきの中からは生まれにくい思いがある。街は人で溢れているし、コンビニエンスストアがあるし、お金があれば必要な物は即手に入れることが可能である。手を伸ばせば、私の助けを思う間もなく手に入る。

谷間に立つ一人は自分に向き合うしか手立てが無い。自分が一番求めていることに向き合うしかない。自分に最も必要な助けを求めるだけだ。谷間で声をあげる者はどなたが助け主であるのか確信する。天地万物を創造された方が、助け主と告白する。一人立つ谷間の風景も実は創造主の手によるのだ。谷間を流れる水と風も御手にある。肌で感じて見上げる山、仰ぐ主こそ助け主と歌う。